

花

長岡紫

「本番で花が咲かないタイプね」

いつ、どこで、誰から言われたのだろう
ふと蘇る 心に刺さった小さなトゲ

ある雨の朝

咲きたくても咲けなかった花が

「蕾のまま 息を潜めて待っていたよ」と
私に告げに来た

花は咲くものなのか 咲かせるものなのか

私は待っているだけで良かったのだろうか

咲けない花を無意識に抱くことは
決して 辛いだけのものではない
否、そのしっとり湿った感触が好きだ

華やかではない花が
近づいてくる足音に
耳を澄ませ 静粛を知る

満開の花には決して宿らない
玉虫色の疼きは
美しい不協和音
大人になって初めて知った

それは 六月だった
掃き清めたばかりの道ばたに
小さな堇が楚々と咲き
その姿を認めた刹那
私が私を打ち破り
生まれ月ゆえの親近感が押し寄せて
滂沱の涙が溢れた

なぜだろう
その一輪が気づいて欲しいと背を伸ばし
半音階を奏でるように
けなげに一小節を主張して
幻想曲に姿を変えた

緑の滴るような六月半ばの日曜日
私の指が舞台の上で震える
コンサートの光と翳
心の万華鏡をのぞき込む

舞台は今、ここにある
毎日 毎時 毎分 毎秒が本番なのだから
一話完結のバラードに纏まるはずもない

花が咲こうが咲くまいが
今日も明日も明後日も

私の《未成交響曲》が紡がれて
音で花が描けることを
決して忘れない

く 弾き終えて 紫色のドビュッシー
まだ見ぬスマイルを 真摯に探す く